

佛蘭西書巡覧 29

平山 弓月

ブリヤ=サヴァランが有名になった理由のひとつとして、そのアフォリズムによるところが大きいのだらうと申しましたが、アフォリズムっていうのは、何かの理論というか、考え方を簡潔な言葉で示すものですね。



辻 静雄

ここ数回、文学的なお話が続いたようですので、今回は「おいしい本」をご紹介します、「おいしい話」をしましょう。すでに皆さんご承知だと思いますが、昨年「和食」が、ユネスコの無形文化遺産に選定されました。食文化としては、「フランスの美食術」が真っ先に登録されています。

フランス料理はフランス大革命を経て、大きく展開発展してゆくのですが、一九世紀に何人もの文筆家が現れ、彼らの存在が大いに寄与したのは言うまでもありません。『**味覚の生理学**』*Physiologie du Goût, 1826* (関根・戸部訳の岩波文庫版は『美味礼讃』の名)を著したブリヤ=サヴァラン*Brillat-Savarin (1755-1826)* は、その中でも、現在までその名を鳴り響かせているのです。

彼は代々法曹界に関わる家系の許に生まれ、自身も弁護士となったのです。大革命時には憲法制定議会に席を得たのですが、のちにそれが仇となり、一時亡命せざるを得ない憂き目にも遭いました。帰国後は再び法曹界に戻り、大審院判事の現職のまま亡くなりました。

この本は最初著者の名前を隠して、出版されました。法律関係の「お偉いさん」が食べ物のことを云々するのを憚ったからであろうと推察できます。つまり、美味しい物好きの知識人が、美味しいもの体験を綴ったといえるでしょう。だからでしょうか、辻静雄先生は、本の構成はどう見ても無茶苦茶であり、未完成のまま世に出されたのではないかと述べられています。にもかかわらず世に広く読まれているのは、「料理人たちがその地位を確保し、世間から一人前の職業人として認められるようになったのは、部分的にはあるが、ガストロノーム(食通・美食家)という人たちが、つまりブリヤ=サヴァランのような著者がいたから」(ゼルディン)ではないかと思われる。

稀代のガストロノーム、ブリヤ=サヴァランの「食」に対する思いを垣間見てみましょう。それには、やはり冒頭に掲げられている「アフォリズム」をしっかりと読むのが一番でしょう。

II Les animaux se repaissent; l'homme mange; l'homme d'esprit seul sait manger.

禽獣はくらい、人間は食べる。教養ある人にして初めて食べ方を知る。

これは、「生きるために食べる*Manger pour vivre*」か「食べるために生きる*Vivre pour manger*」のどちらの立場に立つのかという問題と相通するのです。「教養ある」では、十分に意が通じないのではないのでしょうか。*esprit*に照応する日本語は何でしょう。解き明かすには一巻の本がいるでしょう。私は、「生きてゆく術を心得ている」ことではないかと思えます。

X Ceux qui s'indigent ou qui s'enivrent ne savent ni boire ni manger.
胸につかえるほど食べたり酔っぱらうほど飲んだりするのは、食べ方も飲み方も心得ぬやからのすることである。

大食漢で呑兵衛である私のような「やから」には、耳に痛い言葉です。美味しいものを前にすると、ついつい「ほどほど」ということを忘れ、欲望に走ってしまいがちになります。そのためでしょうか、いつまでたっても一人前にはなれません。

XX Convier quelqu'un, c'est se charger de son bonheur pendant tout le temps qu'il est sous notre toit.
誰かを食事に招くということは、その人が自分の家にいる間じゅうその幸福を引き受けるということである。

食卓を共にするのは、ただ単に同じものを食し、同じ酒を味わうだけではないのです。皆が幸せな時間と空間を享受できなければならないのです。愉快的な会話も欠かせません。人を不愉快にさせる振る舞いは避けなければなりません。これは別に人を招く場合だけではなく、大学の食堂でも、人と食事をとる場合には大切なことです。

いかがでしょうか、ひと時ブリヤ=サヴァランの書を手にとってみられませんか？

(この項を成すに、訳文を含め辻静雄先生の『ブリアー=サヴァラン「美味礼讃」を読む』のお世話になりました。)

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)